

契丹陶磁の「周縁性」に関する検討（5）

—北京龍泉務窯の発展をめぐって—

町田吉隆*

Examining on the Border Character of the Kitai Pottery in China(5)
: To relate with the development of the LongQuanWu Kiln-Site in Beijing

Yoshitaka MACHIDA*

ABSTRACT

We are able to find out an archaic style in the Kitai(契丹)Pottery. These styles are similar to the pottery in the Tang(唐)Dynasty rather than the pottery in the Northern Sung(北宋)Dynasty of the same era(A.D.10-12c). In other words, the style of the Kitai pottery is the border character. This paper will survey the LongQuanWu kiln-site(龍泉務窯) in Beijing. the LongQuanWu kiln-site is most important kiln-site in the Kitai Pottery. It's learned that the LongQuanWu kiln-site undergoes influence of the Xing Yao(邢窯) and the Ding Yao(定窯) in Hebei(河北). However, those influential relations also exist in the part just resemblance is difficult to say where. We will consider about a change in the structure of the tool and the kiln used for production here.

Keywords : pottery, Kitai(契丹), the LongQuanWu kiln-site(龍泉務窯), China, history

1. はじめに

10世紀初めから12世紀初めにかけて華北の一部を含む北東アジアから内陸アジアにまたがる領域を支配した契丹国（遼朝，以下，契丹国と表記）の陶磁器のうち，その領域内で生産された陶磁器を，ここでは「契丹陶磁」と規定する。

契丹国の陶磁器には古風な特徴があることが指摘されている。それは10世紀から12世紀にかけて生産されたものであるにもかかわらず，むしろ唐代の陶磁器に類似しており，同時代の北宋時代の陶磁器とは異なる様式であることを意味する。そして，それはしばしば中心文化が地方へと波及する時差により遅れることを意味する「周縁性」として説明されてきた^{(1)および(2)}。

筆者はその「周縁性」について，

①唐代に盛行した器種（form）である「唾壺」や「陶枕」などが契丹陶磁にも見られるが，前時代の唐代とも，同時代の北宋時代とも異なる点が多いこと。

②低下度鉛釉陶器の技法は唐代の中原地域（陝西省・

*一般科教授

河南省）の陶磁窯の影響を受けていることは間違いないが，その直接的な継承関係は器種や技法でも跡づけることは現時点では難しく，今後の検討を要すること。

③契丹陶磁を生産した陶磁窯は契丹国（遼朝）の都城造営に関連して，「官窯」的な性格を持っていたと推定されてきたが，必ずしも都城や州県城の造営・立地にもなって発展した「官窯」ではなく，陶磁器の需要や購買層の成立により発展した陶磁窯の存在が先行し，「官窯」としての性格は二次的なものであったと思われること。

などから，契丹陶磁が周縁的な性格を有することは認めつつ，その「周縁性」には多様な要素が含まれることを指摘した⁽²⁾。

本稿では，契丹国の支配領域の南にあった邢窯と定窯との関係について考察する。両窯はすでに唐代，華北の名窯と呼ばれていたが，陶磁器生産において具体的にどのような影響を受けたのか，その検討を通じて，「周縁性」の多様な側面について考察する。

るが、窯室の長さが約3mと短く、幅も2m前後で、形状はより長方形に近い。第五期の大量生産志向は窯炉の形態変化にも現れていたとみなすことができよう。

3. 定窯

3.1 窯址調査の概要

定窯は河北省保定市管轄の曲陽県管内に3箇所の窯址が確認されている。同地域は唐代には河北道定州恒陽県、北宋、金代には河北西路の曲陽県に属していた。

窯址の調査は1950年代に表面採集調査が、1960-62年に河北省文化局による潤磁村での試掘調査が1985-87年に河北省文物研究所により潤磁村、北鎮村、野北村、燕川村での発掘調査が行われた。最も新しい調査は2009-10年に河北省文物研究所、北京大学、曲陽県文物保管所による潤磁村、北鎮村、燕川村の6箇所での発掘調査である。ただし、これら一連の調査については簡潔な報告書のみしか公開されていない。

ここでは2009-10年調査の窯址発掘成果展での報告内容に基づいて整理する⁽⁴⁾。

3.2 陶磁器生産の時期区分

潤磁村の遺跡は陶磁器の破片が堆積した潤磁嶺区を中心とする。これは唐代後期9世紀後半に生産を開始した北鎮村より遅れ、10世紀以降、唐末、五代の時期に生産を始めたと思定される。通天河に面した低地から西側丘陵地に窯場が移動したと考えられる。

定窯遺跡の指標となる潤磁嶺区から判明する陶磁器生産は以下の6期に区分することができるという。

①第一期前半：唐末・五代10世紀前半

出土陶片のうち、精緻な白磁が約45%、酸化焼成による青黄色釉磁器が約半分である。窯具としては三葉型の支釘（トチン）と高級器と思われる白磁は匣鉢（サヤ）に格納して焼成していた。

②第一期後半：北宋初期・10世紀後半～11世紀初

出土陶片のうち、精緻な白磁が90%以上を占める。鉄釉を用いた黒釉や醬色釉の陶磁器が少数出土する。窯具は前半と同じである。生産された器種は碗、鉢、水注などを網羅しているが、器下部が碗の高台も含め、精緻な白磁でも無釉な点が第一期前半とは異なる。

③第二期：北宋中期・11世紀初～11世紀末

精緻な白磁が出土陶片の95%以上を占めるが、鉄釉系の碗や浅碗（盞）、瓶の数量は増加している。窯具には匣鉢（サヤ）が用いられ、碗や皿（碟）、大皿（盤）を重ねて匣鉢（サヤ）に納めて焼成するため、口縁部の釉薬を削いだ例が見られる。また円盤上の窯具（支圈）に碗などを伏焼するために口縁部が無釉の陶磁器も見られる。細線で彫った器面装飾も増加する。

④第三期：北宋晩期11世紀末から1127年北宋滅亡

精緻な白磁陶片が約88%、白化粘土を施した分厚い白磁が約3.6%、鉄釉系が約8%含まれる。釉色は青みを帯びた白からクリーム色の白に変わり、酸化焼成が

主流になった。また器面に装飾を施した器が約4割を占める。窯具には円環状の支圈に碗を伏せて、複数の碗と支圈を一つの匣鉢（サヤ）に納めて焼成する大量生産が始まった。また青銅器を模した器や器面に装飾を施した如意頭形の上面を持つ陶枕など他の時期に見られない陶片も出土している。

⑤ 第四期前半：金初期・1127年～12世紀半

最も堆積層が厚い、つまり生産量が多かった時期である。精緻な白磁が出土陶片の90%近くを占める。釉色や成形の水準が第三期以前より劣るとされる。装飾技法には印花（型押し）が増える。精緻な白磁にあってもほとんどが口縁部に釉がかからない芒口となり、円環状の支圈と匣鉢（サヤ）を利用している。それ以外には碗や皿（碟）の器内面を同心円状に釉を剥いで仰向け重ねに焼成する大量生産の技法も用いられており、同じ窯場で製品のクラスに応じて異なる方法を採用していた。

⑥ 第四期後半：金後期・12世紀半ば～13世紀初

精緻な鉄釉を用いた黒褐色の陶磁器が約7%、残りは精緻な白磁である。⑤の時期と大きな違いは無いが、全体のうち、器面装飾のないものが約80%、線彫り装飾が約11.2%、印花（型押し）が約8%で、印花（型押し）の比率が最も増える。このような技法の合理化、簡便化の一方、この時期においても龍文のある碗や盤の底面裏に「東宮」と記す例も多く、金朝の宮廷用の陶磁器をこの時期においても生産していたことがわかる。

3.3 窯炉の構造

窯炉や工房などの生産施設は以前の発掘調査においても発見されているが、比較的保存状態のよい第一期前半期の窯炉と第四期の窯炉が出土している。前者、つまり五代の時期のそれは長さ5.84m、幅4.72mの馬蹄型饅頭窯で窯門、燃焼室、窯室、煙突、保護壁に作業場を備えていた。後者、つまり金代の窯炉は窯室が幅4.2mのほぼ円形の窯室を持つ饅頭窯である。通風道や煙道壁などが設けられ改良の痕がうかがわれる。金代以降の窯炉において燃焼室が大きくなっているのは、床面に堆積している燃焼した石炭滓から、燃料が柴薪から石炭に変化したためと考えられる。第一期前半期に用いられていた柴薪がいつ頃から用いられなくなったかについては、精緻な白磁の釉色に変化が生じた第三期が想定される。薪木燃料では比較的容易であった還元焰焼成が難しくなり、器表釉薬内に含まれる酸化物が釉色を変えたと考えられるからである。

4. 北京龍泉務窯

4.1 窯址調査の概要

北京龍泉務窯（以下、龍泉務窯）は北京市門頭溝区龍泉務村の永定河西岸に窯址が確認され、1990-94年に永定河の川岸から東西方向約240m、南北方向約150m

の範囲を調査区域として発掘調査が行われた⁽⁵⁾。この地域は唐代至徳年間に広平県が置かれ、五代には玉河県と改称され、契丹国が燕雲十六州を得た後にはその県名のまま南京析津府に属した。

4.2 陶磁器生産の時期区分

①第一期：契丹国前期 10 世紀前半～11 世紀前半

白磁が多く、器壁は分厚いが、白化粧土(スリップ)は施されていない。釉色に青灰色を帯びるものがあり、唐末、五代時期の定窯に類似するところがあるという

(3.2①項参照)。器種は大皿(盆)、碗も大ぶりなものが多く、小型の作例の比率は低い。堆積層はかなり厚く、窯具としては碗型の匣鉢(サヤ)や窯柱、円盤状の墊餅(ハマ)などが用いられていたが、三葉型や三角状の支釘(トチン)は出土していない。

② 第二期：契丹国中期・11 世紀半

さまざまな器種が作られるようになり、また線彫り、型押しなど器面の装飾技法が多様になった。陶片は白磁が圧倒的に多いが、胎土は第一期に比べ、細かく精錬され、白化粧土(スリップ)も施されていない。また黄釉、黒釉など鉄釉系や銅を呈色剤とする緑釉が生産されるようになり、いわゆる「遼三彩」の方形小皿や動物のミニチュアが出土している。窯具は第一期の種類に加え、三葉型の支釘(トチン)が使用されている。堆積層から出土した銅銭のうち、最も新しいものが北宋の「嘉祐通宝」(嘉祐 1056-63)であるところから、この時期の下限が 11 世紀後半の早い時期にあったと推定されている。

③ 第三期：契丹国後期から金初期・11 世紀後半～12 世紀前半

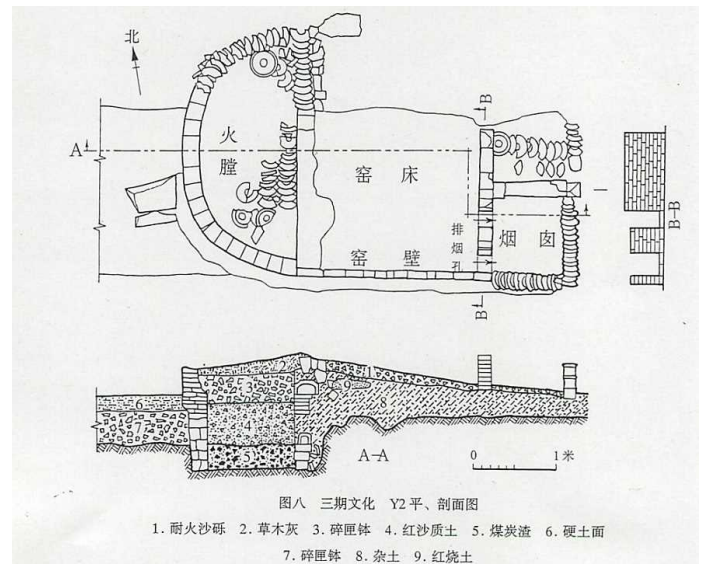
白磁の碗や大皿(盤)などの中には高台だけでなく口縁部まで無釉の例が見られるが、胎土は灰白色で粗いものの白化粧土(スリップ)は施されていない。白磁の釉は厚くかけられ、器面はなめらかである。三彩は器種が増え、菩薩像などの仏像は龍泉務窯の代表的な作例である。窯具は第二期と同じ種類で、三葉型の支釘(トチン)も使用されている。北宋の「宣和通宝」(宣和 1119-25)より新しい銅銭は出土していないため、下限は 12 世紀前半と推定される。

④ 第四期：金・12 世紀

皿(碟)、大皿(盤)が数多く出土するが、それ以前に特徴的な器型(type)であった輪花形(蓮瓣口、荷葉口)は消える。また緑釉や黄釉はほとんどなくなり、鉄釉系統の黒褐色の釉薬もしくは白釉のモノクロームの釉薬が主流になった。いずれも白化粧土(スリップ)は施されていない。窯具としては三葉型の支釘(トチン)がなお用いられているほか、漏斗状の匣鉢(サヤ)の上に碗を重ねて伏焼する技法が用いられた。金の「大定通宝」(大定 1161-89)が出土銅銭の下限である。

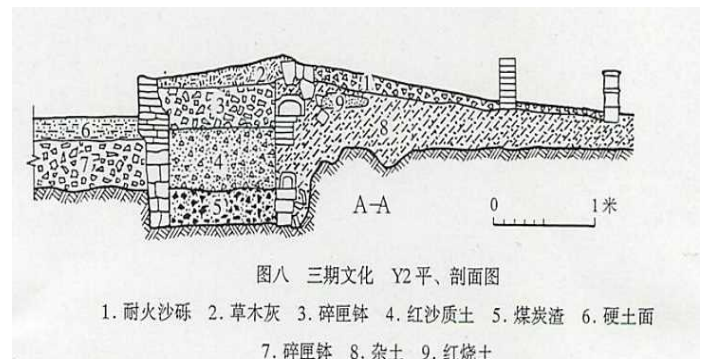
4.3 窯炉の構造

発掘調査の結果、第一期 2 基、第二期 3 基、第三期 5 基、第四期 3 基の窯炉が発掘調査された。すべて饅頭窯である。第一期 1 号炉(Y1)は全長 3.1m、幅約 1.5m、第二期 13 号炉(Y13)は全長 5.5m、幅 5.8m、第三期 9 号炉(Y9)は全長 6.4m、幅 3.3m、第四期 6 号炉(Y6)は残存長約 5m、残存幅約 2.2m である。窯室の形態は 1 号炉(Y1)は楕円形で、第二期 13 号炉(Y13)、第三期 2 号炉(Y2)、第四期 6 号炉(Y6)とも方形に組まれている。



图八 三期文化 Y2平、剖面图

- 1.耐火砂砾 2.草木灰 3.碎匣钵 4.红沙质土 5.煤炭渣 6.硬土面
7.碎匣钵 8.杂土 9.红烧土



图八 三期文化 Y2平、剖面图

- 1.耐火砂砾 2.草木灰 3.碎匣钵 4.红沙质土 5.煤炭渣 6.硬土面
7.碎匣钵 8.杂土 9.红烧土

图2. 龍泉務窯 第三期 2 号炉の実測図および同断面部分の拡大図(参考文献(5) p.48 所載図を転載)

第三期 2 号炉(Y2)の燃焼室では最下層には燃焼した石炭の残留物の層があるが、その上には砂質土、さらに破碎した匣鉢(サヤ)の破片が充填され、最上層に草木灰の層がある。第二期 13 号炉(Y13)、第四期 6 号炉(Y6)の燃焼室には草木灰のみが充填されていたことが報告されている。また 2 号炉(Y2)と同じく第三期 9 号炉(Y9)の燃焼室内には木炭が焼結し、堅い層を形成していること、炭と草木灰が 4cm の厚さで堆積していた。つまり、龍泉務窯の窯炉では 11 世紀後半に一旦、石炭燃料を使用した例はあったものの、その焼成方法は普及せず、再び柴薪燃料を使用するようになったと考えられる。その理由を現時点で絞るこ

とは難しいが、石炭燃料による焼成では生産される陶磁器の品質に問題が生じたのではないかと思われる。石炭燃料は火炎が短く、また還元焰焼成が難しいという特色がある。このような点も関係していたのではないかと考えられる。

5. 北京龍泉務窯と邢窯・定窯

5.1 契丹国の徙民政策

契丹国が建国直後から支配下に入った他の民族を政治的、経済的な理由によって移住させたことは広く知られている⁽⁶⁾。後晋より「燕雲十六州」を獲得した938年以降はその経済的振興のために現在の河北、山西、山東など華北に居住していた漢族が徙民の対象となった。ことに燕州は南京析津府として五京に格上げされ、その郊外に位置することになる龍泉務窯の創焼には河北諸窯の影響があったと想定される。

第二代皇帝の太宗・耶律堯骨は皇太子時代の921年に河北を南下、攻撃し、定窯のあった定州においても住民を略取している⁽⁷⁾。また946年に離反を理由に後晋を攻撃し、一時はその首都があった現河南省の開封を占領した⁽⁸⁾。その過程で邢窯のあった邢州も占領、略奪を受けている。各々の陶磁窯の工人も契丹国に移住させられたであろう。

951年に後周がほぼ華北を統合し、また960年に北宋が成立すると、このような住民略取は容易ではなくなった。1004年、聖宗・耶律文殊奴は南下を開始し、深州などと共に、邢州を攻略しているが⁽⁹⁾、このときは定州を含む河北西路で北宋が防衛し、結果、黄河河畔で対峙した両国は澶淵の盟を結ぶことになる。以降、12世紀初めまで両国間に大規模な武力衝突は起こらないので、平和的な移住を除けば、華北からの組織的な徙民は絶えたと思われる。

龍泉務窯が邢窯、定窯から工人の移動によって影響を受けたと考えられるのは、11世紀初めの聖宗侵攻時にはすでに邢窯の活動が衰退していたので、10世紀、つまり龍泉務窯の第一期にあたる時期になる。

5.2 邢窯・定窯との類似点

龍泉務窯はしばしば「倣定窯」として、定窯と同様の陶磁器を焼成、ある意味において模倣しようとしていたと表現される。たとえば白磁の方形皿（碟）などは定窯のそれと非常に類似している。契丹国時代の副葬品にしばしば含まれるので、この小型の浅い皿が広く好まれていたことがわかる。つまり需要の高い器種であったため、輸入される定窯産品だけでなく、龍泉務窯でも作られたのであろう。

皮囊壺は遊牧民が用いる皮袋の形を模した器種として契丹陶磁にさまざまな器型が見られるが、唐代後期の邢窯においても生産されていた⁽¹⁰⁾。契丹国時代の龍泉務窯や赤峰缸瓦窯よりも先行するだけでなく、器面装飾においても完成した形で出現しており、初期の契

丹陶磁が邢窯の影響を受けたであろうことは間違いない。

5.3 邢窯・定窯との相違点

龍泉務窯が両窯と異なる点も存在する。たとえば窯具の支釘（トチン）であるが、邢窯においても定窯においても唐代においては三葉型の支釘（トチン）が用いられていたが、次第に三角型や円盤状の支釘（トチン）が出現し、その形態は変化していく。一方、龍泉務窯では第四期、つまり12世紀金代になっても三葉型の支釘（トチン）が見られる。



図3. 龍泉務窯 第二期文化出土の方形小型角皿の型押し具（方碟印花模）

（参考文献(5) 彩版 p.3 所載図を転載）

一方、窯炉に関しては邢窯・定窯とも唐代後期10世紀の段階では窯室はやや細長い方形である。面積・容積も五代10世紀以降に比べると狭く小さかった。龍泉務窯は第一期10世紀の段階で窯室は楕円形であり、第二期11世紀半ばには面積・容積も大きくなり、同時代の定窯と比べてほぼ同じかむしろ大きい。饅頭窯は窯室内に格納した陶磁器を均一に焼成するために窯室の面積・容積も限りなく広く大きくすることは難しい。その意味では龍泉務窯では第二期においてすでに窯炉の形態は完成していたと見てよいだろう。

定窯では第三期11世紀末には燃焼室で用いる燃料が柴薪から石炭へと転換する。北宋時代の中期から後期にかけて燃料が石炭に変わることは、河北磁州窯や陝西耀州窯など華北の陶磁器窯にも見られる。ところが龍泉務窯では先に見たように、第三期11世紀後半に一度、石炭燃料を用いながら、柴薪燃料に再転換したような痕跡が窯炉燃焼室の堆積層から窺われる。

また第四期12世紀以降の窯炉にも石炭燃料の使用の痕跡は見られない⁽¹¹⁾。契丹国時代の後期は北宋時代の後期に相当するので、焼成燃料に関しては定窯とは異なる生産技法を採用したといえよう。龍泉務窯の位置する北京西郊は現在に至るまで産炭地として知られ

る。契丹国時代に石炭が燃料として用いられたことは第三期窯炉での使用痕跡からも確認できるが、これをなぜ柴薪燃料に戻したのか。一つ考えられる仮説としては、柴薪燃料では比較的容易であった還元焰焼成が石炭燃料では困難になり、陶磁器に施した釉薬の発色に影響があったのではないかと、ということである。華北において石炭燃料が用いられるようになるのは、北宋時代の経済発展にともない、柴薪燃料が枯渇するためであったとされる。龍泉務窯が周辺の産炭地から供給が得られやすいにもかかわらず、柴薪燃料に戻したとすれば、11世紀後半の南京析津府、12世紀金の中都周辺ではなお柴薪燃料が得やすかったことになる。当時の周辺環境復元を試みる必要があるだろう。

化学的な分析によれば、龍泉務窯第四期にあたる金代の精緻な白磁陶片に含まれる酸化鉄含有量は0.2-0.3%であり、邢窯0.61-2.59%、定窯0.59-2.5%に比べて低い⁽¹²⁾。これは還元焰による燃焼過程で鉄分に含まれる酸素の割合が低下したと考えられる。また焼成温度も邢窯1,150-1,370°C、定窯1,250-1,320°Cに比べ、龍泉務窯では1,239-1,295°Cという測定値が得られ、平均温度で約30°C低い⁽¹³⁾。これも窯炉の形状や燃料の相違によると考えられる。

6. むすびにかえて

10世紀、五代の時期の華北に契丹国が侵攻した際に邢窯・定窯の所在地、邢州と定州も一時支配されている。契丹国はその住民を契丹国内に移住させているが、当時、すでに生産活動を行っていた邢窯や定窯の工人集団がその中に含まれていた可能性はある。石刻碑文など一次史料に基づく証拠はないが、龍泉務窯を開創したのは、邢州や定州から連れてこられた工人集団であったとも考えられる。ただ北宋成立後に工人集団の移動や交流があったかどうかは疑問である。たとえば11世紀初めに聖宗自ら河北に侵攻した際には国境のすぐ南に位置していた定州は攻略されていない。

また古いタイプの窯具を用い続けた点に龍泉務窯の後進性が見られるとも考えられるが、窯炉は11世紀において、同時期、北宋の定窯とほぼ同じ規模で築いている。焼成燃料に関しては定窯の第三期(11世紀末-12世紀初め)には石炭燃料が使用されているが、龍泉務窯では第三期11世紀後半に石炭燃料を用いながら、その後は柴薪燃料に戻ったようにも思われる。龍泉務窯の周辺では石炭燃料が産出しており、その供給を受けることは容易であったことを考えると、この再転換は陶磁器生産の上で柴薪燃料が龍泉務窯では選択されたことを意味する。同時代の定窯とは異なる生産上の志向があったと思われる。つまり唐代以降、華北の名窯を模倣し続けていたわけではなく、市場に対し独自の生産志向で陶磁器を供給していたといえる。

今後は墓葬や城郭都市遺跡出土の陶磁器について定

窯製品とどのような棲み分けが行われていたのか、また12世紀以降、契丹国、北宋の支配領域が金朝によって統合された後の華北陶磁器諸窯全体の視点から考察を進める必要があるだろう。

註

- (1) 小川裕充「遼・西夏の絵画 総論」『世界美術大全集 東洋編5 五代・北宋・遼・西夏』1998, p.125.
- (2) 町田吉隆「契丹陶磁の「周縁性」に関する検討(4) 西夏陶磁との関連から」神戸高専紀要(52) 2014, pp.73-78 など
- (3) 王会民, 樊書海, 張志忠「邢窯遺址調査, 試掘報告」李恩璋, 張志忠, 李軍主編『邢窯遺址研究』科学出版社, 2007, pp.60-112 (原載『考古学集刊』14, 文物出版社)
- (4) 秦大樹, 李鑫, 高美京「定窯的歴史地位及考古発掘新収獲」新井崇之翻訳「定窯の歴史的位置づけと考古発掘の新たな成果」大阪市立東洋陶磁美術館編『定窯—優雅なる白の世界 窯址発掘成果展』, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2013, pp. 27-68
- (5) 北京市文物研究所編『北京龍泉務窯発掘報告』文物出版社, 2002
- (6) 田村實造「徙民政策と州縣制の成立」『中国征服王朝の研究 上』第6章第1節, 東洋史研究会 pp. 272-313
- (7) 『遼史』卷三十四兵衛志上(中華書局本) (神冊)六年, 出居庸關, 分兵掠擅, 順等州, 安遠軍, 三河, 良郷, 望都, 潞, 滿城, 遂城等縣, 俘其民徙内地; 皇太子略定州, 俘獲甚眾.
- (8) 『遼史』卷四本紀太宗下(中華書局本) (会同)八年春正月庚子, 分兵攻邢, 洺, 磁三州, 殺掠殆盡. 入鄴都境
- (9) 『遼史』卷十一本紀聖宗二(中華書局本) (統和二十二年九月)癸丑, 拔馮母鎮, 大縱俘掠. 丙辰, 邢州降. 丁巳, 拔深州, 以不即降, 誅襯將以下, 縱兵大掠.
- (10) 楊俊艷「略談唐代邢窯白瓷皮囊壺」中国古陶磁学会編『越窯青瓷與邢窯白瓷研究』故宮出版社, 2013, pp. 199-208
- (11) 前掲(5)p.419 には「遼中期以降, 大量の石炭燃料を使用したため, 陶磁器の胎土が固く引き締まり, 硬化した磁器化し, 釉薬もきめ細かく滑らかにガラス質が強まった。」とあるが, これらの特徴は高温還元焰焼成による場合に近似しているように思われる. 同書の発掘調査報告部分において燃焼室内部から出土した石炭滓についての記載があるのは第三期下層のみである. (翻訳は筆者)
- (12) 北京市文物研究所編『北京龍泉務窯遼代瓷器科技研究』文物出版社, p.25
- (13) 前掲(12), p.206